

都市河川と市街地を結ぶネットワーク構想 ～両国・日本橋間の地域活性化計画～

千葉工業大学 学生員 ○立石智也
 千葉工業大学 安達富昭
 千葉工業大学 渡辺 薫
 千葉工業大学 正会員 島 正之

1. 背景

隅田川は、日本を代表する川である。かつて江戸の隅田川と日本橋川・小名木川が縦横に走り、舟運が栄えた大都市の中心だった。しかし、戦後の経済成長の中で行われた整備のため、水路は埋め立てられ、舟運も衰退していく。その結果、かつて人々が親しんだ水辺空間は変わり果て、都市と川が分断された。近年、水辺空間の見直しが進められており、再開発と併せて行われている。本論文では、隅田川の水辺空間を再生し人々にとってより魅力的な隅田川を実現するため両国と日本橋川を繋ぐネットワークの創造を図る。

2. 目的

本研究では、3観光拠点、両国から日本橋さらには門前仲町に着目し、この3拠点同士の距離が遠いことから、それらを結ぶ新ルート、また縦の軸となる「隅田川」「テラス」「陸域」と、横の軸となる「日本橋川」「橋」が、ひとつの面となるような隅田川下流地区を対象にして、さらなる観光客の増加を計り、また地元の地域住民が身近で美しいと誇れる隅田川を形成することを論考する。

3. 方法

3.1 水域

実際に隅田川の水上交通量調査を行い、そこから隅田川では観光船やタンカーなど、観光面と工業面で舟運が多く活用されていた。しかし運航時間間隔が疎らなため、新たに水上タクシーとして運行を増やし、水上交通を活性化することも十分に可能である。

3.2 水辺

両国橋から永代橋にかけての隅田川右岸・左岸は、自由に散歩できる開放感と安らぎを得る空間であるため、現状を維持していく。

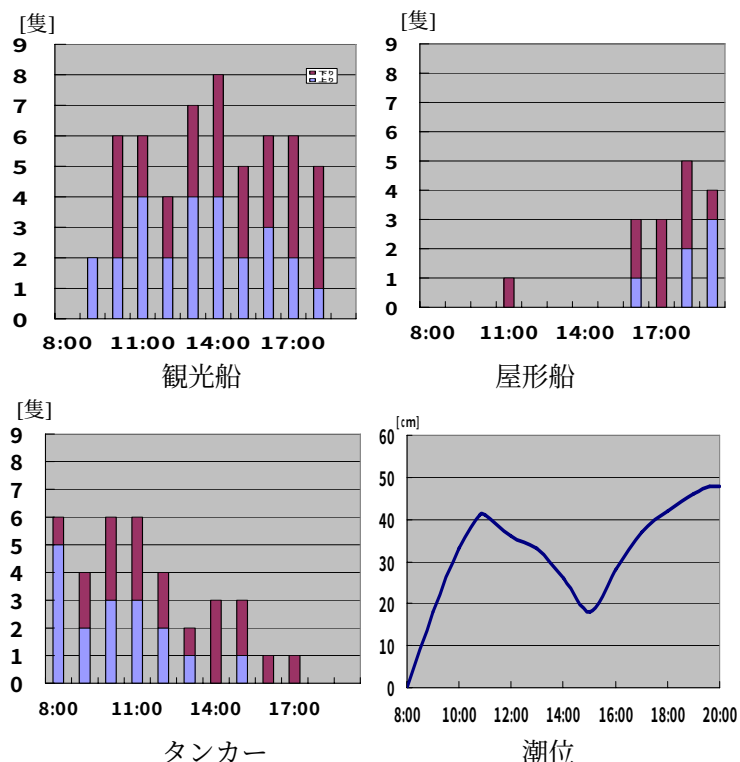
永代橋から日本橋にかけての日本橋川は問題を抽出した結果、街と河川の繋がりが途絶えていた。河川を活かすために、商業の街との関りを持たせていくことが課題である。

3.3 陸域

観光資源を調査した結果、両国・日本橋・門前仲町周辺には多くの文化財・名産店が存在しているものの、3拠点間の距離が離れているため、動線を描きにくい。拠点と拠点の繋がりを改善する必要がある。

3.4 橋梁

隅田川に架かる橋梁群は歴史が古く、陸域を眺められる最良のビューポイントとして、重要な要素の一つである。隅田川からの景観は、ほとんどの場所で川幅が広く、見通し距離が長いいため、奥行き広さ・開放感も十分に感じられた。



図－1 日本橋川合流地点 隅田川航行船と潮位
(2007年10月3日)

キーワード 水の駅、水上タクシー、リバーウォーク、新ネットワーク

連絡先 〒275-8588 千葉県習志野市津田沼 2-17-1 千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科 TEL: 047-478-0446

4. 基本理念

対象地域の歴史・文化は、これまでも地域の観光資源として活かされており、東京の観光拠点としての賑わいを創出している。近年、高規格堤防や親水テラスの整備が進み、街と水辺の関係が改善されつつあり、川と街、水辺と人のつながりも回復されつつある。しかし、両国と日本橋、門前仲町の区間はそれぞれ2kmという距離で離れており、人間が歩くには長く、交通手段も直結していないこともあり、川と街が分断され連続性を失っていて、まだ十分ではないといえる。こうした背景を踏まえ、後世に引き継げる隅田川下流地域のまちづくりを目指すために、今後も、ここで生活している人たちが働いている人たちが、力を合わせて歴史・文化を大切に育んでいくとともに、新たな文化を創り、まちの魅力を高めていく必要がある。

5. 基本構想

今回の研究では、3拠点、両国・日本橋・門前仲町に着目し、この3拠点間の距離が長いことから、縦の「水域」「テラス」「陸域」の3つの軸と、横の「橋」の1つの軸が、糸がメッシュ状に織りなす布のごとく面を構成させ、隅田川周辺地域の魅力の向上により、さらなる観光客の拡大を推進、また地域住民が身近に感じる美しいまちと融合する隅田川を形成し、かつての隅田川の魅力を生かして、観光資源として都市の価値を高め、水辺の魅力創出することを目的とする。

6. 基本計画

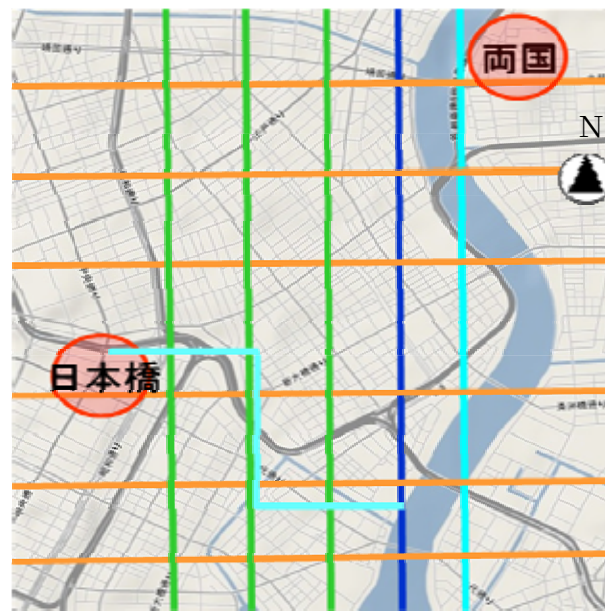
水路・リバーウォーク・陸路を絡めた都市のネットワークを構成するために、水路には小型船の利用を増やし、現在よりも舟運を身近な存在にしていくことで、隅田川上の水上交通を活性化させる。水辺では、隅田川のテラスを安らぎの軸とし、日本橋川のテラスを賑わいの軸として、水辺の回遊性を向上させる。それに併せ、既存の文化財や観光資源を散策できるルートと、歴史ある隅田川にかけられている多くの橋を折り合わせた地域を作り、歩行者がいろいろな魅力を得られるネットワークの提案をするためには、以下の計画を併せて考える必要がある。

1) 水の駅計画 地域を面と捉え、水辺を中心とした地域創出のために、その核となる水の駅を設置する。フィールドワークの印象から、テラス利用者が休める機能が欠けていると感じた。そこで、歩行者のための休憩機能、安らぎの縦軸と賑わいの横軸のテラスの繋ぎ目、そして水の駅をきっかけに地域の連携機能の3つの機能を併せ持ち、主要である舟運機能を活かし、陸域と水域の回遊性を高める施設とする。隅田川周辺の新たな核として水の駅を設置し、水辺における賑わいの向上を図る。

2) 水上交通計画 両国・日本橋の観光事業を促進する上でもこの二つをつなぐ太いパイプ作りが必要不可欠であることから、新たな交通機関の水上タクシーを考案。水上タクシーは、主に観光客が自由に隅田川を回遊することをねらいにし、地域住民にも利用してもらう。

3) リバーウォークの縦横軸 隅田川テラスを安らぎの縦軸、日本橋川テラスを賑わいの横軸とし、縦横で変化のある軸を形成。そのため、縦軸は現状の緑溢れる空間を維持していき、横軸では賑わいのある空間をつくるため、新たなテラスを考案。魅力的なテラスが存在していても、アクセスが困難であると利用者の増加は難しいため、アクセスポイントの見直しも含め、回遊性の高いテラスを造り、安らぎ・賑わいを創出する。

4) 新ネットワークの提案 水上タクシー・日本橋リバーウォーク・水の駅を考案し、水路・リバーウォーク・街路を折り合わせ、面的計画として新たなネットワークの提案を行う。日本橋リバーウォークで商業の街から人を呼び込み、水上タクシーで交通を広げることによって川の流域の行動範囲を広げ、水の駅では賑わいと安らぎの架け橋として両国と日本橋間を結ぶ。これらを地域の核とし、周辺の文化財や資源を繋ぐルート of 新たな起点や終点にもなり、新ネットワークが可能になり、水辺を中心とした地域の魅力の創出を図る。



図ー2 新ネットワークの構想図

7. おわりに

隅田川を豊かな水辺空間とするために、回遊性豊かなテラスの整備を進めるとともに、隅田川・日本橋川を基に両国・日本橋間を繋ぐ。本構想において両国と日本橋を繋ぐネットワークの創造と強化を図り、歴史と文化を受け継ぎ、新しい未来を築く隅田川を創出していく。また今後このネットワーク構想が、他の都市河川と市街地を結ぶモデルとなることを期待する。